

参考資料②展示ストーリー案

萩博物館特別展「めざせ！貝のトレジャー王国」展示ストーリー案

■プロローグ

萩で洒落た和モダンな邸宅に住む姉弟。幼少の頃から貝を集める趣味をもち、集めた貝のコレクションは実に千以上！最近ではライバル意識が芽生え、弟が新しい貝を入手すると、姉が嫉妬し魔術を使って奪取、それを弟が超能力で奪回するなど、争奪戦がエスカレート。二人の競争が激化したのは、萩で最近なぜか貝がとれなくなり、二人の欲望が満たせなくなったからなのだが、原因など考えず、ただ欲望に任せて貝を奪い合う二人。

今日も二人が菊ヶ浜で争っていると、いくつも貝を携えた学芸員風の初老男性に遭遇。すかさず二人はその貝を懇願。すると、初老男性はおもむろに語り出した。「これは譲ることはできない。が、それより、30年間も『魔王』がひた隠しにしている『幻の貝』があるという。世界各地の海底にある『貝の王国』をめぐり、6つの名宝を集めてコレクションを完成させれば、魔王の呪縛がとけ、『幻の貝』を奪還できるという・・・。」

それを聞いた二人は、自分こそが「幻の貝」をゲットすると豪語。初老男性から「シェリング・シップ」（海底の「貝の王国」を探知し、王と交信できる船）を提供してもらい、いざ、世界の「貝の王国」巡りへ出帆！

■世界の貝の王国を訪ねて

船は萩を出て北へ。荒波にもまれ北極点を経て大西洋へ。そこから、ヨーロッパ、西アフリカ、北アメリカ東海岸、南アフリカ、インド、オーストラリア、タヒチ、アメリカ西海岸、熱帯太平洋、東南アジア、フィリピンへ。その途中、船の魔法によっていくつもの貝の王国を探知できたものの、中には環境汚染で滅亡寸前になっている王国も。しかし、姉弟はそのうち5カ所で、王（＝貝の「化身」）から名宝を譲り受けることに成功。

■ついにコレクション完成

フィリピンは千種類もの貝がひしめく豊かな王国だった。その繁栄の源は、世界最大の暖流「黒潮」。この黒潮をたどっていけばもっと大きな王国があり、6個目の名宝を入手できると確信した姉弟は、黒潮の北に向けて船を走らせる。そして東シナ海の王国にて、ついに6個目の名宝（世界最高値のリュウグウオキナエビス）を入手し、コレクションがコンプリート！・・・と、その時、すさまじい暴風が起り、船が激しくあおられる。

■エピローグ

船は黒潮を外れ、対馬暖流につかまり、何かに吸い寄せられるように奔走。その先に見えてきたのは、魔王の姿。そこで、6名宝をコレクションすれば魔王の呪縛が解けるという話を思い出した姉は、魔王に向けコレクション箱を掲げた。すると、その箱から光から放たれ、魔王が倒壊。すかさず弟が飛びかかると・・・魔王の胸が開き、そこから舞い出てきたのは・・・緑の可憐なユリヤガイの化身。ユリヤガイは萩の見島で日本で初めて生きた姿で発見され「二枚の貝殻をもつ不思議な巻貝」として愛されていたが、環境変化で80年代以来30年も消息不明だった。魔王はこれ隠していたのか！・・・今、ユリヤガイの化身が二人の手の平に舞い降りた。

息絶え絶えの魔王が語る。自分は昔学芸員だったこと、貝コレクションを通じ人々に海の魅力や大切さを伝えようと奔走したが誰も耳を傾けようとしなかったこと、世界の貝の王国がそうであるように各地の海が開発や汚染に苛まれ、もはや人間になど海の生物の未来を委ねられないと確信したこと。そして、30年前、自分は人間をやめ魔界に入り、最も大事なユリヤガイをかくまったこと。今も次々と様々な貝をかくまい続けていること・・・。

魔王の悲話と、萩から貝がいなくなったわけを知った二人は同情しつつも、厳しく指摘する。萩にも毎朝ゴミを拾う人々、一斉清掃をする市民、海に興味をもち学ぶ子供達がいること、皆できることを一つずつやっていること。貝が単なるモノではないと悟った自分達は、今後はただ集めるのではなく、貝という「生命の証」をコレクションすることを通じ海の大切さを伝えていく。必ずこの海を未来へ引き継いでみせる！・・・そう語る姉弟の決意を聞いた魔王は安心したように、抱えていた様々な貝を海へ解き放ち、姿を塵のように消していった。

翌日、菊ヶ浜で再び貝を集め出した姉弟。拾った貝を見せ合い、語り合う。落ちたゴミを拾い、ある日は海岸清掃。別の日には、集めた貝を萩博物館「探Qはぎ博」で展示し、来館者へ解説。それを見た子供達が一人、また一人と貝コレクションを始めた。・・・萩の海が少しずつ、けれど確実に、輝いていく。